

「底が突き抜けた」時代の歩き方 544

知のいかがわしさ ― 「教える」ということ

「教祖と教師」（『文学界』05.10）のなかで、千葉一幹は坂口安吾も宮沢賢治も《教師という仕事に魅力を感じながらも、短い期間でその職を辞し別の仕事へと向かっている》のはどうしてか、と問いかけている。《教師という仕事の持つ、あるいかがわしさに耐えられなくなったからではないか、と思っている》と彼は言う。では、《教師の持ついかがわしさとは何か。》安吾は一年間、代替教員として働いた経験を作品化した「風と光と二十の私と」の中で、教師というものは、《もし、たとえば少年達へのお説教というものを、自分自身の生き方として考えるなら、とても空虚で、つづけられるものではない》。自分が教師をやったのは、《臆面もなく老成しきって》いたからであり、《そういう老成の実際の空虚というものを、さとりずにいた。さとりずに、いられた》と語っている。

「臆面もなく老成」するということは、《なんでもわかっていると悟り済ましたように振る舞う》ことであり、千葉一幹は、《この「臆面もなく老成」することこそ、教師という職の持ついかがわしさだ》と言い切る。《教壇にいる間はその「老成の実際の空虚」に気づかないようにしないといけない。少なくとも教師が、ティーチング・マシーンという単なる情報の伝達者以上の何者か、つまりは「師」として教え子たちの前に立ち現れるためには、彼らから単なる知識以上の何かを知っている者と見なされねばならない。

「臆面もなく老成」せねばならないのだ。しかし、普通は、その「空虚」さに気づかないわけにはいかないのだ、教壇を降りた後、自身を振り返って、冷や汗を流すということになるのだ》と、自身も大学教師である彼は言う。《代替教員時代の安吾は、「臆面もなく老成」しきっていたのであり、しかもその空虚つまりいかがわしさに気づかないでいられた》と指摘するが、《「臆面もなく老成」しきっていた》からこそ、《その空虚つまりいかがわしさに気づかないでいられた》のであろう。

教師以外にも、《何かが「わかった」者、「見えた」者として振る舞い、またそう振る舞うことを期待されている者》が世の中にはいる。それは、《超越的高みに立ちそこから現世を俯瞰しようとする覚者》として、《自己の覚醒体験を絶対視する特異な》存在である「教祖」である。教師が「教祖」のように存在しえたとき、《本当に幸福な状態であったろう》が、《しかし、安吾は、その空虚さにいつまでも眼をつぶっていられるほど鈍感ではなかった。》賢治もまた、《「老成」すること、悟りすまずことの空虚、いかがわしさに耐えられなくなった》のではないかと彼は推測するが、賢治については

更に別の理由が付け加わったと思われる。それは、賢治が《職を辞して、羅須地人協会を作り》、《一種のコミュン運動のようなものを目指した》ことからすれば、学校の中では賢治が本来目指そうとしていた《コムニ運動》は不可能だったからではなかったか。

賢治も安吾も「老成」することの《空虚、いかがわしさに耐えられなくなつて》、短期間で教師の職を辞することになったが、《ならば私を含め、教職に長年ついているものは、どうしているのか。「老成」しきっているのか、というと、そうではない。多くの教員は、多分「教師」というものの意味を理解していないのだ。「臆面もなく老成」することが要請される、本当はともしんどい職業であることを知らないのだ。そうでなければ、日本に何十万という教員がいられるはずもない。ほとんど教師は、「老成」する振りすらせず、なのに、教師というだけで「偉い」と勘違いしていて、そんな連中が、セクハラやら暴力事件を起こしたりするのだ。》彼はそう述べる。何十万という教員が、もちろん、《「臆面もなく老成」すること》から免れているわけではない。「臆面もなく老成」する水準にすら達していないのかもしれない。「老成」の振りなどしなくとも、説教を垂れる者として教壇に立つことを教育制度は保障しているのだ。

では同様に、《「臆面もなく老成」し、しかもその空虚に気づかない、ないしは気づかない振りをする》点で、「教祖」と「教師」はどのように異なるのか。

《宗教には終わりはないが、教育には終わりがある。実際学校はいつまでもいられるところでなく、一定の期間が経てば、卒業なり、退学なりという形で教育の場から退場しなければならない。もちろんこれは、公務員におけるシステムの問題で、そうでない私的な機関たとえばカルチャーセンターのようなら何年でも通い続ける事が出来る。しかし、公教育に組み込まれた年限という制度は、システム上の要請ということだけでなく、教育の本質につながる問題だと思う。》

千葉一幹のこの指摘に対して、宗教は少なくとも強制ではなく自発的であるが、教育は自発的ではなく強制的である、と言えるかもしれない。宗教は自発性ゆえに終わりはなく、教育は強制ゆえに終わりがあるということだ。もちろん教育の強制は、《公教育におけるシステムの問題》であり、その教育の強制は教育が知の位階制として現実社会の階層制度とつながっていることをあらわす。つまり、教育は選別を本質として現実社会と結びついている。宗教もまた、信と非信を選別する本質を有するが、信の道へと突き進むか、非信のまま動かずにいるかは各人の意思に委ねられている。したがって、宗教は本来的に教育と異なって、現実社会の階層制度と結びつくことはない。しかし、オウム真理教がそうであったように、宗教の脱社会性は反社会性へ反転する過激さを本質としてもっており、そこが現実と結びついた教育と決定的に異なっている。

《弟子は、師を何かを知っている者とみなし、近づこうとする。それを知るために、弟子は、師に付き従い、師の全てを模倣しようとする。そこでは、弟子は師の人格的支配の下にある。この段階での師と弟子は、宗教における教祖と教徒の関係と大差ない。し

かし、教育には、終わりがある。弟子は、師の人格的支配を脱し、自立しなければならない。師は弟子に対して、「老成」の空虚さを開示しなければならないのだ。これは、「臆面もなく老成」することよりも遥かに困難なことだ。というのも、急激に師の「老成」の空虚さを開示してしまうと、自立どころか、逆に弟子から生きる力自体を奪う可能性があるからだ。》

ここにみえる《師と弟子は、宗教における教祖と教徒の関係》であり、教育における教師と生徒の関係である。しかし、《弟子は、師を何かを知っている者と見なし、近づこうとする》ことは、宗教では当てはまるが、教育では必ずしも当てはまらない。なぜなら、宗教においては《師を何かを知っている者と見な》すようになるのは弟子であり、師に《近づこうとする》のも弟子であり、たとえ師の何かに呑み込まれてしまったとしても、すべて弟子の自発的意思に基づいている。騙されるのも騙されないのも、すべて弟子の計らい^{はか}という以外にない。だが教育はそうではない。生徒は教師を《何かを知っている者と見なし、近づこうとする》わけではない。生徒が教師をそうみなす前に、教師はすでに《何かを知っている者》として、生徒の前に登場しているのだ。だから、生徒がそんな教師に《近づこうとする》前に、《近づこうとする》ことが前提になっている。

師の何かを《知るために、弟子は、師に付き従い、師の全てを模倣しようとする》こともしたがって、宗教の場合はそうだと言えるが、教育の場合は必ずしもそうだとは言えない。生徒が教師に《付き従い、師の全てを模倣しようとする》よりも、その前に模倣するように仕向けられてしまっている。教師は生徒が《模倣しようとする》者として、生徒の前に立ち現れているからだ。宗教において《弟子は師の人格的支配の下にある》のは、彼がそのように望んでいるからであるが、教育においては生徒がそのことを望まなくても、教師の《人格的支配の下にある》。

しかしながら、生徒は教師の《人格的支配の下にあ》りながらも、そのことに自発的でないことによって、教師の人格的支配を拒否することができる。つまり、教師の《人格的支配の下にある》ことを望まないことによって、生徒は教師の人格的支配を拒絶するところに自発性を発揮しようとする。その点が、宗教の場合と決定的に異なっている。

《宗教における教祖と教徒の関係》が濃密であるのに対して、教育における教師と生徒の関係は、生徒が教師による人格的支配を望まないことにおいて、濃密であることはできない。更に、均質化されていく教師としての力量と《教育には、終わりがある》ことによって、教師は生徒に対して自らの人格的支配を及ぼすことは決定的に不可能になっている。《弟子は、師の人格的支配を脱し、自立しなければならない。師は弟子に対して、「老成」の空虚さを開示しなければならない》と千葉一幹が説くことはしたがって、《宗教における教祖と教徒の関係》においてこそあてはまる。

ここで言われていることは、弟子は師を乗り越えて自立しなければならないし、師は弟子に乗り越えられるように弟子を育成しなければならないということである。《弟子

は、師の人格的支配を脱し、自立しなければ》、師の《「老成」の空虚さ》の中で窒息するに至る。問題は、師の《「老成」の空虚さ》に弟子が気づくようになるか、気づくところまで成長できるか、逆に言えば、気づくところまで師が弟子を鍛えあげられるか、というところにある。父と子が本来的には子が父を乗り越えようとするか、父が子の乗り越えを阻止しようとするかの激しい争闘の関係にあるように、師と弟子の関係も激しい争闘の関係にある。師は弟子を抑え付けながらも、弟子が自分を乗り越えて自立する手助けをしなければならず、抑え付けと手助けの双方において師であらねばならない。強力に抑え付けながら鍛えあげることが手助けになっていくようにして、師は弟子を導いていく必要があるのだ。

千葉一幹によれば、小林秀雄を「教祖」と名付けた「教祖の文学」で坂口安吾は次のように捉えた。《「美しい『花』がある、『花』の美しさという様なものはない」といった名文句で、読む者を一気に小林の世界に引き込む。その時、人は小林こそ何ものかを知った覚者だと思うだろう。しかし、小林の「当麻」や「無常といふ事」には、この小林の世界から抜け出るような契機が欠落している。人はいつまでも「教祖」小林秀雄に臣従する教徒のようなものに止まってしまう。》

小林秀雄の世界にはいつまでも弟子を抑え付けて乗り越えさせない「教祖」だけが存在しており、自分の世界を乗り越えさせるために弟子を誘導しようとする「教師」は存在していない、ということだ。人間の視覚に飛び込んでくる「美しい『花』がある」というのは、その通りであろう。しかし、その視覚の次元を離脱して「『花』の美しさ」という抽象の次元へと移行したとき、もはやそこでは「『花』の美しさ」は感覚の次元にはない。「『花』の美しさという様なものはない」とは、そういうことであろう。いくら思考を巡らせても、それだけのことが言われているにすぎない。だが、それが一体どうした、ということになる。そんな《名文句で、読む者を一気に小林の世界に引き込む》が、読者はその先へと突き進むことができず、名文句の前で立ち止まって小林秀雄を「教祖」と仰ぎ見るしかなくなってしまう。小林の言葉とはそういうものではないのか。

《しかし、賢治の場合は、違う》と安吾と共に、千葉一幹は言う。賢治の「眼にて云ふ」という詩は「疾中」と題された詩篇に含まれており、《昭和3年から4年にかけて肺炎に罹った賢治は死をも覚悟するほどの重篤な状態に陥った。その後、回復して事なきを得たが、その時の瀕死の経験を後に作品化したものと考えられている。》その詩について書かれている。

《詩は、冒頭いきなり「がぶがぶ湧いて」出るほどの咯血をしているという描写から始まる。ほとんど半死の状態で、周囲も半ばその生還を諦めているのだが、本人は「血がでてゐるにかゝはらず／こんなのにんきで苦しくないのは／魂魄なかばからだをはなれたのですかな」と離人症のようなことを語る。最後は「あなたの方からみたらずるぶんさんたんたるけし〔き〕でせうが／わたくしから見えるのは／やっぱりきれいな青ぞら

と／すきとほった風ばかり」だという言葉で締めくくられている。

死の床にある自身を離れたところから眺めているような一種の臨死体験を描いた詩なのだが、「がぶがぶ」という滑稽味のある擬音語や「どうも間もなく死にさうです」という他人事のような言葉が、ユーモラスな雰囲気や死に瀕する者を描写したこの詩に付与している。フロイトが、月曜日に絞首台に登る罪人が「今週も、幸先がいいらしいぞ」ということに見出した「ユーモア」が、典型的な形で現れた詩である。

たしかに、死の床にあることをどこかおかしみさえ感じさせることに仕上げている賢治の詩に較べると、安吾が批判するように、「当麻」や「無常といふ事」の小林の姿勢には、「見るべき程の事をば見つ」といわんばかりの、達観した者のようなところがあって鼻につく。安吾が、超越的高みに立ちそこから現世を俯瞰しようとする覚者のような小林には、「眼にて云ふ」での、血を「がぶがぶ」吐き瀕死の状態にある賢治の眼に映った「青ぞら」や「風」のようなものは、決して見えない、というのも納得できる。》

小林にはけっして見えなかったものが賢治にはあるというとき、その小林に見えなかった「青ぞら」とか「風」というものは、一体なにをあらわしているのだろう。

《瀕死の賢治が見たもの、それは「青ぞら」や「風」のようなものでしかない。どこにでもある、ありふれたものだ。瀕死の中で、しかし、死を恐れるのでなく、むしろユーモラスに死につつある自分を眺めてしまう、悟得した者のような賢治。それは、「老成」した師にふさわしい態度だ。しかし、その師の眼に映ったものは、小林が見出した歴史の必然の相や美学的真理のようなものでなく、単なる「青ぞら」や「風」だという。賢治の知の核心にあったものは、空虚そのものなのだ。追い求めた師の核心にあったものが「青ぞら」や「風」だと知った途端に、弟子たちは、眼を覚ますだろう。

だが、「教師」が「教祖」でなく、師であるために要請されるのは、小林の示す意味ありげな「真理」の幻影でなく、「青ぞら」や「風」のほうだ。弟子に必要なのは、自立することであり、そのためには、師の所有する知の空虚さに一度は触れねばならないから。》

ここはよく立ち止まって考えてみなければならない。「あなたの方からみたらずるぶんさんたんたるけし [き] でせうが／わたくしから見えるのは／やっぱりきれいな青ぞらと／すきとほった風ばかり」という、賢治の詩からは、千葉一幹が言うように、《瀕死の賢治が見たもの、それは「青ぞら」や「風」のようなものでしかない。》しかし、それらは《どこにでもある、ありふれたものだ》ろうか。確かに「青ぞら」や「風」は《どこにでもある、ありふれたもの》かもしれないが、人々はそんな「青ぞら」や「風」を《瀕死の賢治が見た》ようにして、見ながら生きているわけではない。なるほど人々もまた、「青ぞら」や「風」を忙しさのなかで見上げたり感じることもあるだろう。だが人々がふと見上げる「青ぞら」や「風」は、《瀕死の賢治が見た》「青ぞら」や「風」と同じものではない。人々の見上げる「青ぞら」や「風」は単なる風景であって、自分自身を突き抜ける空虚ではありえないからだ。

「あなたの方からみたらずゐぶんさんたんたるけし [き] でせうが／わたくしから見えるのは／やっぱりきれいな青ぞらと／すきとほった風ばかり」という詩は、あなたが見ている瀕死の「わたくし」はもう透明になって、「青ぞら」と「風」が「わたくし」を吹き抜けているだけであることを言いあらわそうとしていたとみられる。賢治にとって自分が瀕死に陥っている状態とは、「わたくし」がなくなりつつある状態であり、「わたくし」がなくなって見えてくるのは「きれいな青ぞらと／すきとほった風ばかり」ということであろう。《死を恐れるのではなく、むしろユーモラスに死につつある自分を眺めて》いるのだが、その《死につつある自分》とは、「わたくし」から解放されつつある自分であることはいうまでもない。したがって、瀕死の賢治が見た「青ぞら」や「風」とは、千葉一幹がみるような《単なる「青ぞら」や「風」》ではなく、消えつつある「わたくし」の中に入り込んでくる「青ぞら」や「風」ということであるだろう。

瀕死の賢治が見た「青ぞら」や「風」は、「自然は水際立っている」という高村光太郎の言葉とよく照応していると思われるが、《どこにでもある、ありふれたもの》ではないということは何度も強調しておかなければならない。それは自分がなくなりつつあることによって、自分から解放されることによって入手される、つまり、みえてくる「青ぞら」や「風」である。では、そのような「青ぞら」や「風」とは、一体なんであるのか。「わたくし」が消えて初めて自然と同化した感覚であるかもしれない。自然になった、あるいは自然に還って行くということだ。人間を含むあらゆる生物は自然に還って行くけれども、生きながらにして自然に還っていく感覚に触れたということが重要なのである。なぜなら、「わたくし」を超えるまなざし、感覚をもって世界に向き合うようになるからだ。

死に囚われず、死を恐れる「わたくし」に囚われず、自分自身から解放されるという最大の自由に直面していることを、賢治の詩は示していた。そのことをもし「空虚」とみなすなら、人間の一生そのことが「空虚」だといわざるをえない。ただ賢治が味わっていた「空虚」は「わたくし」を放棄していくすがすがしさであって、「わたくし」に拘束されるなかでの満たされぬ思いとしての「空虚」とは対極にあった。だから、《賢治の知の核心にあったものは、空虚そのものなのだ。追い求めた師の核心にあったものが、「青ぞら」や「風」だと知った途端に、弟子たちは、眼を覚ますだろう》という千葉一幹の指摘は、「わたくし」を突き抜けていく「青ぞら」や「風」への一瞥が欠落しているが故に、《単なる「青ぞら」や「風」》と混同されることによって、弟子たちの覚醒には大いなる誤解が孕まれていくにちがいない。

小林秀雄にとって瀕死の賢治が見たような「青ぞら」や「風」が無縁であったとすれば、彼には「わたくし」から解放されていくまなざしや言葉が根本的に欠落していたということである。そうすると、《小林の「当麻」や「無常といふ事」には、この小林の世界から抜け出るような契機が欠落している》ということは、小林自身が自分の世界か

ら抜け出すことができないことによって、彼に師事する弟子たちも彼の世界から抜け出すことができなくなってしまうことを意味しているだろう。このことは逆に、《追い求めた師の核心にあったものが、「青ぞら」や「風」だと知った途端に、弟子たちは、眼を覚ます》のではなく、賢治自身が自分の世界から抜け出しつつあるのを知って、《弟子たちは、眼を覚ます》のであり、彼らが自身の世界から抜け出すことを賢治から迫られていることに気づくようになるということを示唆しているのではないか。

《弟子に必要なのは、自立することであり、そのためには、師の所有する知の空虚さに一度は触れねばならない》と千葉一幹は説く。《弟子は、師の人格的支配を脱し、自立しなければならない》と先に書いていたことからすれば、彼の言う「自立」とは師の世界から抜け出ることだろう。しかしながら、師の世界から抜け出するためには、自分の世界からも抜け出る必要がある。つまり、師の世界からの自立と自分の世界からの自立を同時に果たさなくてはならない。真の自立とは、師の世界から抜け出ることが自分の世界からも抜け出るようになることだ。なぜなら、自分の世界そのものが師の影響下にあってかたちづくられてきているからである。自立するためには、《師の所有する知の空虚さに一度は触れねばならない》というときの「知の空虚さ」とはどのようなことなのだろう。千葉一幹が言う「知の空虚さ」とは、瀕死の賢治が見た「青ぞら」や「風」にあらわされており、次のように論じていく。

《ただ、師の元を去った弟子はやがて気づくはずだ。賢治が示した「青ぞら」や「風」こそが、空虚であると同時に真理であったと。死の床にあった賢治の眼に映ったいつもと変わらぬ「青ぞら」と「風」。それは、きっと賢治の死後も変わらずにあり続ける。世界は自分の存在とは無関係に存在してきたし、今後も存在し続けるということ。それは、一面自身の存在の無意味さを告知される体験である。が、同時に一個の有限な生に執着する自身の卑小さを笑い飛ばしてくれる爽快な経験でもある。師の元を巣立った弟子は、やがてそのようなことに気づくはずだ。》

繰り返すが、《死の床にあった賢治の目に映ったいつもと変わらぬ「青ぞら」と「風」というものはない。死の床にあった賢治と元気に活動していたときの賢治とが同じでありえない以上、それぞれの目に映る「青ぞら」も同じではありえない。「わたくしから見えるのは／やっぱりきれいな青ぞらと／すきとほった風ばかり」という詩の言葉は、自分の目を通してこれまで見ていた「青ぞら」がもはや自分の目から外れることによって、「青ぞら」そのままが「きれい」に映っていたということであり、「風」そのままに「すきとほった」ものとして感じたということだ。つまり、自分の目で見る濁りが消えていく「わたくし」として、「青ぞら」や「風」と相対していることが伝えられようとしていたのである。自分の目とはもちろん、主観に覆われた、知に侵食された目であり、そのような濁った目では「青ぞら」や「風」をそのままのものとして見たり感じたりできないことが、詩の言葉で詠まれていたのだ。

主観や知に覆われた自分の目で見ている「青ぞら」や「風」は、あくまでも自分の目を通した「青ぞら」や「風」にすぎず、いいかえると、自分の「青ぞら」や「風」であって、「青ぞら」そのままで「風」そのままでなかった。そんなことは当たり前ではないかという声に対しては、当たりのことであるけれども、そんな当たりのことを知らずに、あるいは忘れて、自分が見ている「青ぞら」と自分以外の人間が見ている「青ぞら」とは同じとみなして、誰が見ても同じ「青ぞら」が変わることなくありつづけていると思い込んでいるのではないかと返しておかなくてはならない。《死の床にあった賢治の目に映ったいつもと変わらぬ「青ぞら」と「風」。それは、きっと賢治の死後も変わらずにあり続ける》という千葉一幹もまた、その思い込みに囚われたまま、指摘する。だから、《賢治の死後も変わらずにあり続ける》「青ぞら」と「風」は、世界に置換されて、《世界は自分の存在とは無関係に存在してきたし、今後も存在し続ける》というように読み込んでいく。

そこから《自身の存在の無意味さ》の告知と、《一個の有限な生に執着する自身の卑小さを笑い飛ばしてくれる爽快な経験》を覗き込んでいくが、確かに賢治の詩にはそのような経験が含まれているかもしれないとしても、賢治の「青ぞら」や「風」が消えていきつつある賢治の中にそのまま入り込んでくる「青ぞら」や「風」であることを見落としてしまうなら、彼の瀕死の経験の持つ大切なことまで押し流されるにちがいない。賢治の詩から最大に読み取らなくてはならないのは、主観や知に覆われた自分の目を通して「青ぞら」を見る以外にないとしたら、人間には「青ぞら」にそのままの状態^{あいま}で相見えることは遂に不可能ではないか、という問いであろう。この問いはもちろん、所詮世界とは自分が切り取ってきた世界にすぎず、自分の目で見える世界の中を動きまわっているだけのことではないか、という問いへとつながっている。

瀕死の賢治が見た「青ぞら」や「風」が、これまでの彼が見ていた「青ぞら」と異なっていて、本当に「青ぞら」そのままであったかどうかは知らない。ただ、《死の床にある自身を離れたところから眺めているような一種の臨死体験を描いた詩》で、死に直面している自分について「どうも間もなく死にさうです」と他人事のように見るだけでなく、同じまなざしで「わたくしから見えるのは／やっぱりきれいな青ぞらと／すきとほった風ばかり」であるという様子は、明らかに生身の自分から抜け出た、あるいは自分を突き放した、あるいは自分の外に出た場所から、死の床にある自分と等価に「青ぞら」や「風」を見ている〈自然さ〉が獲取されているのが感じられる。賢治の場合、瀕死であるということは死の恐怖に全く拘束されておらず、むしろ彼の主観やこれまで積み上げてきた知が瀕死に陥っていることを示しており、それらから彼が解放されつつある様相すら呈しているのだ。

もし主観や膨大な知が威力を振るっていたなら、死の床では自分の死と共に自分の蓄えてきた知が消失していくことを嘆き悲しんで、死の恐怖に悶え苦しむのかもしれない

が、少なくとも瀕死の賢治が見たような「青ぞら」や「風」が彼の死の床に飛び込んでくるようなことはなかったにちがいない。千葉一幹も言うように、死の床にあって「青ぞら」と「風」が見えるということがすべてであった。死の床にあってなお、というのが千葉一幹の見方であったなら、死の床にあったからこそ、というのが私の見方であった。死の床にある誰にとっても、「青ぞら」や「風」が見えるというわけではない。おそらく死の床では「青ぞら」や「月」が見えなくなることのほうが多いにちがいない。前述したように、死の床では我執がより一層強まってくることが考えられるからだ。では、死の床で「青ぞら」や「風」が見える賢治には、どうしてそのようなことが起こったのか。

賢治をよく知らないままに想像すると、彼は生きていくうえで知を必要としながらも、知に拘束されていく自分に気づき、知の拘束から逃れようとする格闘を不断に繰り返していたのではないか。農学校の教師生活がわずか4年半ほどしか続かなかったことも、そのことの証左かもしれない。彼は生徒たちと共に農業を学び、共に農作業に従事しようとしていたのに、教師としての彼に課せられていることは、生徒たちに多くの知識を授けることであった。農作業に従事するなかで必要な知識を習得していくならともかく、農作業に着手する前に生徒に多くの知識を習得させることに彼は気が進まなかった。なぜなら、知識を通して物事に近づくこととするのは、知識によって物事から遠ざけられることにほかならなかったからだ。知識を習得することは知識に閉じ込められることであり、知識から解放されていくような知識の習得でなくてはならないことを、賢治は4年半の教師生活で痛感させられたのではなかったのか。

千葉一幹は教師生活について、《賢治は「じつに愉快的な明るいもの」だと形容しているが、にもかかわらず、職を辞して、羅須地人協会を作り、新たな活動を始めている。そこで賢治が行ったことは、勉強会や農業講習会、音楽会の開催、また農作業といったものであり、一種のコミュン運動のようなものを目指したと考えられる。賢治にとっては、この羅須地人協会での活動が年来の願望であり、それを実行するために農学校を辞職したということになっている》と説明する。教師を辞めて作った羅須地人協会が《一種のコミュン運動のようなものを目指した》とすれば、賢治にとって羅須地人協会は学校のような知識を媒介する関係ではなく、知識に囚われないコミュン運動のようなものではなかったか、と推測される。

教師を辞めたとき、賢治はおそらく知識を授けるあらゆる立場からの辞職をも決意したのではなかったか。そのような賢治であったからこそ、死の床で自分が習得してきている膨大な知に閉じ込められずに、むしろすべての知から一挙に解放されるようにして、生まれたての赤ん坊が見るまなざしで「青ぞら」と「風」が見えたのだと思われる。瀕死に直面した賢治に見えた「青ぞら」や「風」を、千葉一幹は《きっと賢治の死後も変わらずにあり続ける》単なる「青ぞら」や「風」と見なして、そこに「知の空虚さ」を見出した。いくら人間が懸命に知を積み上げても、瀕死の床で見えるのは「青ぞら」や

「風」にすぎないとすれば、《一個の有限な生に執着する自身》は自身の死後も存在し続ける自然(世界)に到底敵わないという認識であった。だが千葉一幹は、その認識の中にやはり賢治を閉じ込めたと考えざるをえない。

瀕死の賢治が見た「青ぞら」や「風」は、紛れもなく彼の到達点であり、彼の成果であった。知識にとっての最後の課題は知識をうずたかく積み上げるのではなく、その積み上げた知識からいかに抜け出てくるかにあるとすれば、瀕死の賢治が見た「青ぞら」や「風」はその課題を成就したように見える。知識から解放されることが、あるいは知識を放棄することが知識にとっての最後の課題だとすれば、そんな知識など当初から身につけなければよいではないかということになるが、人間は社会の中で無知のまま生きられるようになってはいない。つまり、否応なしに知識を身にまとわねばならなくなっている。そうであるなら、知識を積み上げていくことによって、ますますあるがままの現実から遠ざかり、知識に^{からと}掬め補られていきつつあることに気づくようになることが、そしてその膨大な知識から抜け出してあるがままの自然(世界)に相対できるようになることが、知識にとっての到達点とみなさざるをえなくなる。

知識にとっての最大の眼目は、知識の外にいかにして立つことができるか、にあるという別の言い方もできる。知識の外に出ることが知識にとっての最大の力量であり、その力量を手にするためにこそ知識を習得しなければならないのだ。登山を例にとれば、知識の山を目指して頂上を極めることに知識の課題はなく、極めた頂上から降りてくるところに知識にとっての本当の課題は潜んでいるにちがいない。瀕死の賢治が見た「青ぞら」や「風」には、知識の拘束から抜け出た自在な賢治が映しだされているように思われてならない。死の床にあって、「やっぱりきれいな青ぞらと／すきとほった風ばかり」が見えるとすれば、それは知識にとってのまさに至福であって、千葉一幹のいう「知の空虚さ」とは異なるのではないか。死に直面しても「青ぞら」や「風」を見たにすぎなかったのかではなく、死に直面することによって初めて「青ぞら」や「風」に丸ごと向き合えたことに、人々は驚きや感動を覚えてもよかったのである。

《安吾は、小林秀雄を「教祖」と呼び批判した。その安吾自身、一時期教師であった。だが、その「老成」の空虚さに気づき、教職を辞した。賢治もまたそうであった。安吾も賢治も、教師という職業は、短い期間で辞めてしまったが、教師というものが、「教祖」でなく、何であるかを知悉していたのだと思う。安吾も賢治も、教師の職を辞すことで、万人の師になったのではないか》と千葉一幹は自分の文章を締め括ろうとする。大学教である彼は、自身が発した《安吾も賢治も、教師の職を辞すことで、万人の師になったのではないか》という言葉をどのように自分につきつけるのだろう。なにかを教えようとしたとき、教師であることから最も遠ざかり、なにも教えようとしなくなったとき、教師であることに最も近づいたということかもしれないが、安吾や賢治が教師の職を辞したとき、あらゆる教師的立場をも辞することによって、《万人の師になった》

と解するなら、そのことを大学教師の彼はどのように受け止めるのだろう。

《少なくとも、私にとって、安吾や賢治の作品を読むことは、師と話すときのような、何事かがもたらされる経験であり続けている》というのが千葉一幹の結語であるが、安吾や賢治の作品に対して《万人の師》として相対すると言うなら、大学教師である自身もまた彼らと同様に、《万人の師》としての道を歩みだすことによってしか、彼らの作品を《何事かがもたらされる経験》として受けとめることはできないのではないか。彼が大学教師としての自身を深く追い詰めざるをえなくなっているのは、石原千秋「学生と読む『三四郎』」の書評(『文学界』(06.6)のなかで、こう述べていることから明白である。

《漱石の『こころ』は、「私」すなわち弟子の視点から描かれた先生の姿であり、石原の本は師の立場から学生との交流を描写した本だという違いはあるが、『こころ』もこの本も、その一つの主題は教育にある点で共通する。『こころ』で語られた教育の姿とは、教育とは知の伝授にあるのではなく、むしろその不可能性の告知にあり、それは先生の死により達成されている。石原版『こころ』においても、石原自身が成城大学を去ることで、つまりは、もはや師はいないことを示すことで教育の完成が告げられている。》

教育によって知を伝授することは不可能であり、したがって教育の役割はその不可能性を告知することにあるというとき、では、教育を仕事とする教師はそこではどのように「存在すること」ができるのか。いうまでもなく教師は知を伝授する教育者として任命されているから、知の伝授の不可能性を生徒にむかって告知することはできない。途は二通りである。学校の教師であろうとするなら、不可能かどうかにかかわらず、知の伝授に努めなくてはならない。しかし不可能性を告知しようとするなら、安吾や賢治のように、学校の教師を辞さなくてはならない。『こころ』では不可能性は先生の死においてやってきた。《教育とは知の伝授にあるのではなく、むしろその不可能性の告知にあ》ると言い切ってしまうなら、千葉一幹はいよいよ大学教師である自身を追い詰めてしまうだろう。もちろん、教師を辞めて済まされない問題が大きく横たわったままである。

それは、知の伝授の不可能性を告知するだけでは不十分であり、知が制度知として位階制をかたちづくって現実社会に張りめぐらされ、その根底を支えているという問題にまで突き迫らなければ、「知の空虚さ」は師—弟子の次元に閉じられてしまうだろう。《安吾も賢治も、教師の職を辞することで、万人の師になった》としても、安吾でも賢治でもなく、教師の職を辞さずに《万人の師》になどなるつもりも、そんなことを考えたこともない多くの教師が自覚しているか否かにかかわらず、「知の空虚さ」の中で生徒に向き合おうとしているのである。現実社会が「知の空虚さ」において成り立っていることの問題にまで踏み入ったところでの知のあり方こそが依然として問われているのであり、千葉一幹も大学教師としての自身を問い詰めるだけでなく、「知の空虚さ」をますます露わにしている大学内外の制度知の根幹を問い詰める作業も同時に展開する必要があるだろう。

2006年7月9日記